慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	今永清二著 『福澤諭吉の思想形成』
Sub Title	Seiji Imanaga, The Thought-Making of Yukichi Fukuzawa
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1979
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.52, No.8 (1979. 8) ,p.104- 110
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	照会と批評
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19790815-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

今永清二著

『福沢諭吉の思想形成』

はじめに

「福沢はわが国の独立を文明への到達と考えた。そして、日本が一応文明化した段階、すなわち明治十四年（一八八一）ごろ、日本の進路を『脱亜』の方向で示して決定づけ、明治十八年（一八八五）には『脱亜論』を公表した。彼の説くわが国の独立と近代化、要するに『脱亜』の問題は、福沢思想がきわめて多面的であるが故に、さまざまな視角から考察されねばならない」（iiiページ）と今永教授は、問題を明らかにされている。

顧みると、福沢はまことに毀誉褒貶にいろどられた思想家であるといわねばならない。戦中は国家主義思想の先駆者にまつりあげられ、戦後は民権論の創始的中核として脚光をあび、今日では〈脱亜入欧〉論者として、あたかも日本の今日をミスリードした近代文明論者として批難が浴びせられようとしている。だが考えて見ると、福沢は思想家であつたがゆえに、その思想の切り口でどのようにも顕彰することができ、あるいは貶下の対象にもなりうる。あえていえば、思想家であるからこそ多面的な思考が表出しているのであり、だからこそ福沢を自分の好むところで顕彰することがあつてはならないのだ。

われわれは幸いに、丸山真男氏を始発点とする、丸山氏に薫陶を受けた人たちの〈多面的〉研究業績を共有している。そうしたなかで、現在、西欧近代へのほとんどいわれのない中傷蔑視――それは本来、われわれが勝手に〈西欧近代〉と思いこまされたものに対する自己批判抜きで、あたかもそれを贖罪羊に擬して恥じない無責任であり、さらにはきわめて危険な伝統主義への反動に傾斜するものなのだが――のあるいはターゲットに福沢の「脱亜」がなりうる、そうした情況を、いつたいどのように対象化するのか、がある意味でわれわれの知性の試金石になろうとしているのではないだろうか。

福沢にとつて〈文明〉とはいつたいどのような価値であり、それはどのようにして人間とかかわるのか、そしてまた人間と国家は、文明を媒介にした時、どのように有意に結ぶのか。そうしたことがなぜ〈脱亜〉にならねばならないのか。あるいは、その場合の〈亜細亜〉とはいつたい何なのか。

今日、われわれは、われわれ一人ひとりと、そうした人間の容器としての国家との有意なつながりの新たな礎定を一方とし、人間の容器として真に有意な国家の新しい位相をようやくたずねることを他方とする地点に差しかかつている。専門家でもない私が広島大学今永教授の本書をとりあげたのは、福沢の思考が、人間の情況の今日性に重大な示唆を与えうると考えているからである。それは困難

な時点に立つた真摯な思想家の思想的営為が、常に新しく常に創造的であることを、私が思い信じているからにほかならない。

※

今永教授は、福沢の脱亜論形成を、福沢の思想形成の起点であつた中津における知的状況に求める。「この問題を中津での漢学の師白石照山や、西南戦争に西郷隆盛に応じて政府に武力で抵抗した増田宋太郎らとの関係、また福沢の西南戦争観などから考察する必要があるのではないかと考えつづけてきた」（iiiページ）と述懐された著者は、さらに、「勤王にあらず佐幕にあらず、儒教を攻撃し、国政を批判し、あたかも『脱亜』のごとく、福沢は『独立自尊』の道を歩いた。その福沢を、また『脱亜論』に結実する彼の日本近代化論やアジア観を、郷里中津の歴史のなかで考えてみることは無意味ではあるまい」（ivページ）と視点を明示する。

今永教授は「福沢をその原点から考え直し、その周辺から少しずつ洗い直してみたい」（ivページ）と考えられたわけだが、その姿勢はたんに福沢の知核に迫まるだけではなく、地方史的発想にもつながり、また民衆史にも結束する点できわめて大きな可能性をはらんでいる、というべきであろう。たとえば第一章と第二章では豊前の漢学が、そして第三章と第四章は豊前の国学の情況が語られ、その地域の同時代的文化ならびに知的情況がまざまざしく明らかになる点で、私の指摘は誤りないはずである。

この情況が明らかになればなるほど、しかしながら、福沢の思想核形成の外因としては、その重大性は薄れることをも意味せざるをえない。つまり、今永教授が、福沢の儒学的素養を考究する時、そして福沢の国家思想を儒学の師との共通性に発見しようとする時、そこでの指摘は推定の域を脱しないことが逆に明らかになつてしまうのである。たとえば、「彼〔白石照山＝内山〕に漢学の手ほどきをうけた福沢諭吉が文学を重視しつつも自然科学の紹介・導入に努めたり、実学を強調したりしたことにも、照山の無形の影響があると見てよいのではなかろうか」（六〇ページ、傍点＝内山）とか、「国権論においては福沢は伝統的な思考から解放されているとはいえず、照山の国権思想の無形の影響を見出すような思いがする」（七七ページ、傍点＝内山）とされる叙述に、この点が明らかであろう。

しかし、だからこそ中津時代における福沢の知的学習のその思想形成に及ぼした影響に探り針を入れることがむずかしいことが手にとるように分るのであり、『自伝』が傑作であればあるほど、「如斯なことを思えば、父の生涯、四十五年の其間、封建制度に束縛せられて何事も出来ず、空しく不平を呑んで世を去りたるこそ遺憾なれ。又初生児の行末を謀り、之を坊主にしても名を成さしめんとまでに決心したる其心中の苦しさ、其愛情の深き、私は毎度此事を思出し、封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心事を察して独り泣くことがあります。私の為めに門閥制度は親の敵で御座る」とする福沢に中津を見つくしてしまう短絡も生ずるのである。このむずかしさに挑み、短絡を拒否した今永教授に、私が共感と敬意を払いつつ、本書を読み進めたのは、教授がどんなにか福沢に近接しようとして、

近接できないそのもどかしさが行間に読みとれたからであつた。

※　※

前述したように、本書は第一章「野本白巌の南進論」および第二章「白石照山と福沢諭吉」をもつて「豊前の漢学」状況、そして第三章「柳田清雄と渡辺国学」および第四章「増田宋太郎と西南戦争」をもつてその「国学」状況を叙述し、第五章「福沢諭吉のアジア観」および第六章「福沢諭吉の『脱亜論』」をもつて、前諸章を受けた形で福沢への集約を果たしている。

三浦梅園・帆足万里・広瀬淡窓の〈豊後学〉としての漢学が「梅園・万里が漢学に西欧の自然科学をとり入れて、それぞれ独自の条理学・窮理学という学問を形成したのに対して、日田の淡窓は筑前の亀井南溟・昭陽父子の学問を継承して、蘭学などの西洋思想を吸収することがなかつた」（九ページ）点で二系統に分離したなかで、豊前の思想界は、万里の高弟野本白巌によつて新しい位相が導入された。

梅園・万里の特色は、一に「西欧の科学思想を漢学に摂取し、独創的な条理学・窮理学を体系化」した点と、二に「経世・実用の学としての性格を有していたこと」（一〇ページ）にある点である。さらに「幕末の中津・宇佐における学問を考察するとき、注目をひくことは、漢学と国学思想とがきわめて密接な関係にある」事実である。今永教授はこの点を次のように指摘されている。

「日本儒学史を概観した場合、江戸幕藩体制の政治イデオロギーの役割を果した朱子学は、徂徠学の出現によつて『天理』にかえるに『作為』、つまり人為的な聖人の道を追究し、朱子学的原理を克服する方向を模索しはじめた。そして、朱子学的『天理』の法則を否定することにより、日本儒学は朱子学とは異る変質をとげ、ここに国学の展開という新たな道を切り開くことになつたのである。」（一一ページ）

中津・宇佐の幕末漢学者である野本白巌および白石照山が、徂徠学派の亀井派漢学に傾倒したポイントは重大である。つまり、「白巌・照山によつて代表される幕末の中津・宇佐の漢学は、豊前における国学の発達をも促す役割りを果したのであつて、豊前の儒学が徂徠学の流れをうけていた」（一一ページ）が、キイ・トーンとして本書を貫通しているのである。さらに続ければ、「白巌・照山の学問は、豊前知識人の国学受容とその展開を準備したということができるのであり、幕末の多彩な思想活動が展開されることになる」（一一―一二ページ）状景がここにひらけてくるのである。

白巌がこうした知的脈絡の中で「漢学に加えて蘭学にも関心を寄せており、西洋の自然科学をも吸収しながら、国家の経倫を説く新しい実学的方法」（一六ページ）をとるにいたつたのは、そして『海防論』にその国家経倫への抱負をたきこめたのも、いわば必然的であつたろう。

その白巌の『海防論』としての南進論が、次章での白石照山論とのつながりで、福沢の脱亜論に微妙に投影している、と見るのが第一章のテーマである。すなわち、「福沢の『脱亜論』には南進論が

具体的に展開されているわけではないが、それは南進論をふくみ、また同時に容易に南進論へと転換しうるものであつた。こうした『脱亜論』の論理の源流を考えるとき、中津藩儒官野本白巌が南進論を主体とした海防策を論述したことは、きわめて重要な意味をもつものといえる」（一九ページ）のである。

白巌の海防論の骨子は、「防衛的に西洋列強の侵略を防禦するのではなく、『大艦巨砲』を製造して国家を守備し、少なくとも船艦の半数は外国を周遊して海外事情を調査するとともに、時に攻撃的に侵冠・掠奪を行うこともいとわぬ」（三〇ページ）ところにあつた。つまり〈進取的海防論〉であり、その説くところは、封建制の強化による国防体制の確立を基礎とした点にあつた。さらにその進取性は、当時一般の知識人が北進論にその主張点をおいたのに反して、南進論に強い力点をおいたことも、その特色であつた。

かくして、今永教授は、「福沢の漢学の師白石照山が、中津藩校進修館で藩儒だつた白巌から漢学を学び、白巌と同じように『北門の危機』を強調した事実等を考慮すれば、白巌は伝統思想に密着し、福沢は伝統思想から解放されていたという根本的相違はあるにしても、海防策・国防論ないし国権論については、福沢が少年のころ照山から直接対外危機にめざめた政治への関心をぢかにひきおこされたかは疑問であるが、そこに思想的な系譜がないとはいえないであろう」（四三―四ページ）と推定しておられる。

白巌が福沢の思想形成の遠因と見る立場は、福沢の漢学の師白石照山の位置を強調しないわけにはすむまい。第二章はその意味で、明らかに、今永教授の本書での重要な部分になつている。そのポイントは、照山の国権論にある。彼の国防論『備魯西亜策』は、ロシアの武力脅威の排除策として、奥羽諸侯に北海道を分担させ、それによつて国防的封建体制を確立することを眼目とするものである。

「照山は白巌のように大艦論を提唱することもなく、また南進論や北進論も唱えなかつたが、国権論においては両者一致し、漢学者の立場から中国の歴史に範を求めて、国際危機の対策を模索したのであつた。彼もまた現状に批判的な経世学の視点から、対外危機にめざめた政治的関心を高めた。」（六八ページ）

今永教授は、福沢の漢学の素養が「一と通り漢学者の前座ぐらいなつていた」（『自伝』）ところから、「福沢が『泰西究理』の実学を希求し、そこから近代思想の萌芽をもつたことは事実であるが、反面、伝統的な『天』という理念を使用して変革的原理を説明していることに注目すべき」（七〇ページ）と指摘しておられる。このことは「福沢の国権論が伝統的な思考から解放されているとはいえず、照山の国権意識の無形の影響」（七七ページ、傍点＝内山）の上になり立つているということを意味している。

この指摘は、しかし、福沢が欧化主義を抜けでて、西洋文明を克服するべき対象としたこと、そこに彼の一身独立して一国独立す、という人間と国家を有意に結ぶための媒介項の求め方を、国際環境の変化による危機意識と欧米列強の侵略からの防衛を照山や白巌と同一方向にとりすぎる憾みがひそんでいるのではないか。

K・マンハイムが「解放された知識人とは、生きのびている習俗

の圧力からも、またかれら、国家主義の教義と人為的イデオロギーを吹き込もうとする宣伝家の操作的攻撃の圧力からも、自己を精神的に離脱させうる人間」（池田秀男訳『自由・権力・民主的計画』未来社、一一三ページ）だと規定した、その解放された知識人としての福沢と、危機意識にとらわれ、漢学にとらわれた照山の〈とらわれ〉とは、果して同一線上に位置しうるものなのか。〈抜けでる〉手段として洋学を身につけること、その手段性の強調に、福沢の合理精神のいしづえがあるし、同時にある種の混迷があるはずなのである。

※　※　※

豊前の国学を論じた第三・四章は、福沢の暗殺を執拗に試みた国学者たちとして福沢に対極的にかかわりをもつ、つまり、本居・平田の学風を継承し、「いわゆる古道派国学を中心に展開し、東九州の一角に『草莽屈起』の精神を培った」（九〇ページ）中津・宇佐の国学は、盲目の柳田清雄（第三章）と増田宋太郎（第四章）によって、今永教授にとらえられている。

明治政府が近代化政策を推進し、民権の実現に力点をおかなかった点が彼らによって撤底的に批判の対象になったのは、草莽の国学として地方民衆にそれが結びついて、一種の民権論の担い手になったことによる。「それは民衆に語りかけるという点では、『治国安民』という為政者の立場から、自らを区別するものであった」（八一ページ）のだ。そうだからこそ、対外危機の深まりにともなう〈国権〉の確立が、国家を内から支える人民、つまり草莽の権利拡大に拠らねばならぬ、とする立場に立ちつくしたのである。

こうした草莽の国学が福沢暗殺に結んでゆくには、もう一つの事情がある。すなわち、王政復古後の中津藩にあっては、上級武士が福沢の影響下に開明派を形成して主導権をにぎったために、下級武士（道生館派）の尊攘意識がためられた状況である。それに福沢の痛烈な儒教批判ひいては国学に対する批判がからんでくる。かくして、「道生館派、すなわち宋太郎らは、中津藩から幕府研修生として欧米諸国に派遣され、進んだ西洋の文物制度や思想を日本に移植して近代化をはかり、新時代の先覚者としてもてはやされている福沢を、『国賊』としてとらえ、福沢の暗殺を計画・実行せんとしたのである。」（一〇五ページ）

福沢の暗殺が暗殺者たちの功名争いという奇妙な事実の中で消滅したことは失笑ものだが、その暗殺者の中心的存在としての福沢の再従兄増田宋太郎の西南戦争への同調・挙兵はかなり興味をそそるところである。増田が前述した国学者の役割の担い手として、尊攘派から共憂社の結成による自由民権論者へと変貌する情況は特に奇とするにたりない。したがって、板垣退助との連携によって「中津地方の自由党の首領」的存在になったことも怪しむにたりない。しかし、共憂社の機関紙『田舎新聞』による政府弾劾が、西郷の決起に応じての五八名による中津隊挙兵が、当時の宇佐郡三九か村にわたる百姓一揆のひきがねになったことは、地租改正をめぐる問題として考えておいてよいことがらである。

「増田宋太郎は中津隊を率いて蜂起し、西郷軍に投じて反体制運

動にその生死をかけ草莽革命への情念をもやした。それは、王政復古になつて四民平等を立場とする社会が実現はしたものの、実質的にはほとんど変革がみられず、幕府政権に代つて藩閥政府が成立したにすぎない現実に対する批判であり、自由民権運動に合体していく旧尊攘派に共通する思想的特質でもあつた」（一五四ページ）が、「宋太郎の場合は共憂社のメンバーに後藤順平ら士族以外の農民や町民をも組織して、士族中心の民権から脱皮し、『攘夷』の概念を普遍的な抵抗の概念に高めた」（一五七ページ）ところに特色が認められねばならない。ここには、福沢の放伐論としての「有名無実と認む可き政府は之を顚覆するも義に於て妨げなし」（『丁丑公論』）に、その論脈は異なるにしても、結んでゆくところがある。「ここには、福沢の洋学的民権と宋太郎の草莽的民権とが奇しくも結合しうる可能性」（一六七ページ、傍点＝内山）が見られる。

※ ※ ※ ※

第五・六章は福沢のアジア観と脱亜論に照明が与えられる。福沢の対外危機意識がきわめて深かつたことは言うをまたないし、だからこそ一身の独立と国家の独立を懸命に啓蒙したのだが、それは何よりも欧米諸国にたいする「独立」の主張であつた。したがつて、半開・野蛮なアジア諸国からの「独立」不安は深刻ではないのであり、かくてアジアの中での独立ではなく、文明世界の中での独立が第一に優先されねばならなかつたのである。その意味での〈脱亜入欧〉であつたのだ。今永教授がこの点について次のように指摘されたのは、アジア侵略のイデオローグとしての福沢でなく、状況認識と先見性において文明史家であつた福沢を鮮明にしている。

「そこには、文明化＝西洋化を強く求めて欧米諸国に対して独立を達成しようとするわが国の自負、一方、文明化をなしえない中国、朝鮮に対する失望と蔑視、そして、両国の非文明化が日本外交に及ぼす悪影響に対する危惧の念が吐露され、結局、日本は西洋の文明国と進退をともにすべきことを力説する論調となつている。」（二〇九ページ）

しかし、福沢が独立の手段とした西洋文明がきわめて攻撃的なそれであるかぎり、「われは心においてアジア東方の悪友を謝絶するものなり」（『脱亜論』）が、大日本帝国の膨脹主義に接続されるおそれは十分にあつたわけである。だが福沢の文明観が一種の相対主義であり、西欧化絶対主義でなく、西欧文明の超克によるより高度な文明社会の実現を希求していた点（一九三ページ参照）をカウントしておかないと、思想家福沢の意味を歴史的に問えなくなる、というべきであろう。

おわりに

「福沢をその原点から考え直し、その周辺から少しずつ洗い直してみたい」（ivページ）と今永教授は書いておられる。

福沢研究にあつて、その思想形成前期はもつとも困難なところである。というのは、福沢が前述したマンハイムのいう〈知識人〉の性格を特徴的に備えていて、いわば思想のぬぎかえ・ぬぎ捨てによ

る〈自己解放〉の実践者であつたからである。

したがつて、思想核の形成を、現代政治学的にいえば、第一次社会化過程においてよいのか、という問いが福沢研究家にはついてまわるのではないだろうか。今永教授の論考が進めば進むほど、ある種の違和感が生まれてくるのを私はふせげなかつた。

しかし本書が、福沢研究のいちばん厄介なところ、つまり手を入れにくいところにふみ分けられたことは確実であり、幕末から明治への転回の思想史的背景が見事に組みこまれていることには驚嘆した。今永教授が本研究を踏まえられて、よりさらなる展開をわれわれに提供してくださることを、期待してやまない。

（四六版・二五四ページ・勁草書房刊・一九〇〇円）

（一九七九・六・三）

内山　秀夫